

第二次日本経穴委員会委員長・形井秀一氏インタビュー

WHO経穴部位国際標準化公式会議まであと1カ月！

経穴部位国際標準化は鍼灸界と日本国民へのメッセージだ



聞き手：編集部

WHO（世界保健機関）による経穴部位国際標準化が、10月31日からの3日間、つくば国際会議場で開催される公式会議をもって、いよいよクライマックスを迎えようとしている。これまでに開催された日中韓3カ国による経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議は計6回、TFTミーティング（タスクフォース会議）は計3回、そして日本国内における第二次日本経穴委員会作業部会は20回以上。日本、中国、韓国が自らの鍼灸の歴史、古典文献研究、臨床集積をぶつけ合った集大成ともいふべき、この公式会議開催を目前に控え、その内容や日本で開催されることの意義などについて、第二次日本経穴委員会委員長・形井秀一氏（筑波技術大学教授）に話をうかがった。

● 中韓3カ国のほかに6カ国が参加

— WHO経穴部位国際標準化公式会議の開催まで2カ月をきりました（インタビューが行われたのは9月7日）。会議に向けた準備は順調に進んでいますか？

形井 今年の3月に東京大学で開かれた第6回経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議で、中国語で記述された日中韓3カ国の原案はほぼ固まりましたが、実は6穴（迎香、水溝、禾

膠、環跳、勞宮、中衝）については、1つの部位に統一できなくて併記する形になっていたり、細部の詰めが十分でないものもありました。そのため6月27日から29日にかけて韓国・大田（テジョン）のKIOM（韓国韓医学研究院）で最終的な確認作業を行い、中国語による公式決議案の修正は終わりました。これが第3回のTFTミーティングです。しかし、最終的なWHOの決議は英語で採択されますので、中国語の原案を英語に翻訳して英語の案を会議までに作成してお

かなければなりません。

今は日中韓の英語の原案を公式会議に提出するための最終的なチェックを行い、公式会議の参加者に事前に配布する準備をしている段階です。

— 今回の公式会議に参加するのはどういった地域や組織の人なのでしょうか？

形井 日本、中国、韓国の3カ国に加え、アメリカ、イギリス、シンガポール、ベトナム、モンゴル、オーストラリア、それにWFAS（世界鍼灸学会連合会）やAAOM（米国東洋医学会）等の鍼灸団体から代表がやってきます。

日本には鍼灸師がいますし、中国には中医師、韓国には韓医師がいます。また、いくつかの国ではそれら3カ国にならって制度ができてきていますが、多くの国には鍼灸に関する制度がないので、おそらくそういった国や組織からは、鍼灸を行っている医師もしくは有識者で、経穴に造詣が深い人が参加するのではないのでしょうか。

● 日まで何が起こるかわからない!?

— なぜモンゴルなど鍼灸と関係のなさそうな地域が参加するのでしょうか？ そういった人を集め、公式会議では具体的に何を行うのでしょうか？

形井 公式会議はWPRO（WHOの西太平洋事務局）が管轄する西太平洋地域の会議なので、WPROに所属する国が参加します。もちろん、モンゴルで鍼灸が行われていないわけではありません。

会議のメインテーマは3カ国が作成した部位案とその英語表記の確認です。参加者は発言権のあるアドバイザーという同じ立場で参加しますが、各国の人数が異なっています。日本と中国と韓国は経穴部位の標準化案をつくった国と

WHO経穴部位国際標準化公式会議

会期	10月31日～11月2日（3日間）
会場	つくば国際会議場
公式言語	英語
協議事項	<ol style="list-style-type: none"> 1. 基本原則の決定 2. 3カ国が作成した部位案とその英語表記の確認 3. 経穴の図説について 4. その他

して4名ずつ参加しますが、他の国からはアドバイザーは1名ずつしか参加しません。

— 公式会議でいろいろな国が発言することで、約3年にわたって日中韓で決めてきたことに対して、かなり修正が出ることも考えられるのでしょうか？

形井 そこはわかりません。どういう風に会議を進めるか、何をもって決定とするかは会議のはじめに話し合います。つまり、公式会議の話し合いのルールを冒頭に決めるわけです。たとえば経絡ごとに、肺経なら「肺経で何か異論はありますか?」と聞いて、なければ「これはいいですね」と決めていくかもしれませんし、もしかしたら1穴1穴ずつ確認しなければいけないという人がいるかもしれない。そこは会議に臨んでみないとわからない。

そのために1カ月前に資料を渡して、全穴をチェックしてきてもらうことになっています。非常に単純な話でいうと、英語圏の人からは「そんな英語表現では全然伝わらない」という意見も出てくるかもしれません。また経穴のことにこだわって研究している人がいれば、「このツボをこの場所を選んだのはおかしい」とか「古典のこの解釈はおかしいから、こうすべきだ」といった意見が出されるかもしれません。

どういう会議の進め方をするにせよ、最終的には全部の経穴について、アドバイザー全員が

了解する形にならないと終われません。従って、公式会議では、学術的な知識を持った方たちに、日中韓でつくった案が適切かどうか意見をもらいながら、最終的に361穴すべてを決めることになります。

— 会議の協議事項の中に、「経穴の図説」や「その他」と書かれていますが、これは何を話し合うのでしょうか？

形井 経穴の国際的な標準部位が決まったら、WHOから公式な標準経穴部位の冊子が出るはずですよ。たぶん来年の春とか、遅くとも半年から1年の間に出ると思うんです。でも、単に英語で書かれた文章だけではわかりにくいですよ。だから図を入れるわけですが、その際、その図をどういうものにするのか、また普及するための掛図は各国でつくるのか、それとも公式なものを1つつくるのかといった問題が出てきます。そういった図説に関するいろいろなことを検討するのも会議の協議事項の1つですが、実際はそこまで話し合う時間があるかどうかはわかりません。

また、3年間の検討を重ねてきた経穴部位国際標準化ですが、「古典を踏まえる」という原則のもとで決めたわけですから、実際の臨床試験や実験研究を進めていくと、他の部位の方が適切であるという考え方が出てきたり、あるいは解剖的な研究によってある経穴が3センチずれていたとか、今後いろいろな修正が出てくる可能性があります。

そうすると3カ国で行ってきた非公式な会議も、単純にこれで即解散ということではなく、検討を継続するために委員会を存続させるなど、今後の対応策を含めた将来のプランについても話し合わなければなりません。

ですから、内容は盛りだくさんです。しかし、もし論議が紛糾しても、最低でも、経穴部位に

対するアドバイザー全員の合意だけは取り付けないといけません。経穴部位が決まらないと話になりませんから。図説や将来のプランが話し合えなくても、それはそのあとWHOが再度召集して話し合えばいいですからね。

●本で開催されることの意義

— 1989年にジュネーブで行われたWHOの鍼用語標準化国際会議では経穴名が決まったのに、日本ではあまり認知や普及が徹底されなかったという話もあります。今回の公式会議の決定を今後どのように広めていくお考えですか？

形井 その会議には、(第一次)日本経穴委員会も参加しました。そこでは正穴を361穴に定め、361穴すべてに英語表記とコードナンバーが決められました。日本では医歯薬出版が発行している『標準経穴学』という本が日本経穴委員会が編纂したものです。

ですが、社団法人東洋療法学校協会と日本理療科教員連盟が出している教科書にはそれとは異なり、354穴しか載っていません。7穴は奇穴として扱われているのです。また英語表記もコードナンバーも載っていませんし、1989年のWHOの会議では漢字の表記についても決まりましたが、それについても学校協会と理教連の教科書はWHOのものとは一部異なっています。つまり、日本ではWHOが決まったことが、その後学校教材に採用されていないのです。

今回はそういった前回の反省を含め、学校協会と理教連にも事前に話をさせていただいています。大事な教育機関も注目していただいているので、今回はWHOが決まったことが反映される可能性は高いと思います。

— そういった重大な決定が日本で行われることは意義深いですね。

形井 もちろんそうです。開催場所については、

WPROのオフィスがあるマニラ、WHOの本部があるジュネーブで行われる案もありました。当然、中国も韓国も公式会議の自国開催に名乗りを上げました。ただ我々第二次日本経穴委員会としては、なんとしても日本で開催したかった。5つの運営団体（社団法人全日本鍼灸学会、社団法人日本鍼灸師会、社団法人東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟、社団法人日本東洋医学会）や協賛企業などから協力を得られているのは、経穴部位の国際標準化作業が日本の鍼灸に意味がある動きだと認識していただいているわけですからね。また逆にこの動きを1つのきっかけにしながら、日本の鍼灸を医学関係分野だけでなく、もっと多くの人々に知ってもらいたい、厚生労働省にも日本の鍼灸がWHOとしっかり関係を持ちながら活動していることを認識してもらいたいという気持ちもありました。

ですから、その集大成として最終的な決定が行われる場を日本が主催して開催することは非常に大きな意味があると思っています。

——これを契機に国にも、国民にもアピールしてもらいたいと思います。最後にこれまでかわって来られた印象や今後の思いを述べてください。

形井 私自身もこの活動を通して韓国や中国と交流しているいろいろなことがわかってきました。たとえば日本が戦後、日本鍼灸として進めてきた研究は地道に積み重ねてきたものだと思っていました。それは間違いではないんです。けれども、実際に中国や韓国の研究者と交流してみると、古典に対するデータベースのつくり方や研究者の数、あるいは情報収集に対する力の入れようなどは日本とは比べられないぐらい中国や韓国のほうがすごいんですよ。韓国には韓医学の国立研究所が10年前にできているし、中国



中医科学院は昨年50周年記念をやっています。一方、日本には国立の研究所はありません。

もちろん個々の研究者は負けていないつもりです。ですが、組織的に考えると、ボリュームは圧倒的に違うし、そのうえ中国や韓国は国のバックアップがあります。つまり、経穴部位の国際標準化作業を通して、日本がやらないといけないものが見えてきたのです。今、本当に日本はあん摩、鍼灸、漢方を国として考えないといけない状況に追い込まれていると思います。そうしないと韓国や中国のものに埋没されてしまう。そういうことを痛感したし、勉強になったということだけでも、経穴部位の国際標準化作業は日本にとって意味のあることだと思います。

また以前、朝日新聞の1面に「日中韓のツボの位置が違う」というような記事が掲載されましたが、鍼灸を普段意識しない人にもこの会議の果たす役割は大きいと思います。あの記事は少しセンセーショナルな書き方でしたが、みんなが興味を示してくれましたから。そういう意味でも、この国際標準化の公式会議は非常に重要で、日本の国民に鍼灸を認識し直してもらえるきっかけになると思っています。